



全身全霊



ナカノリエ

17.18.19を見守り支えてくれた人たちが、一人また一人と天に召されていく。闘う牧師、一人風神雷神図、スノップなおじさま、二十歳手前と大人気なく張り合うことで生意気を盛り上げていたトリックスター、どこを取っても、一筋縄ではいかない人ばかり。いわゆる全共闘世代の人たちが多くて、気骨の違い、迫力に圧倒されて、私などは借りてきた猫だった。彼らの気遣いに気がつかないほど鈍く、それでも私の居場所はそこにあった。居場所と言っても、誰が逃えるというものではなく、ほんの少し勇気を持てば、そこに座っていられるのだ。

1年目は友達に夢中になり、2年目は「交際」で脱線し、3年目ようやく、講師たちと話ができるようになった。まともに勉強したのは、仲のよい友達が進学し、私は浪人した最後の一年。それまで、朝が苦手だった私が、母親と並んで、自分の分と妹の分のお弁当を作り、ラッシュの電車に乗って代々木駅へ向かい、そこから歩いて千駄ヶ谷の大検科の校舎へ通った。

父の言葉はこうだった。「予備校へは行かせてやる、この金はオレはドブに捨てたと思うからお前の好きにしろ、ただし、お前が決めたのだから必ず大学に入ること」見事に3年間もドブに捨てさせたことになる。しかし、私の人生にとっては、父より少し年上の彼らとの時間が、その後の人生を支え続ける。私はカオスの中で砂金をさらって過ごしていたんです、お父さん。

当時、私は薬剤師を目指していた。そして、とても自信過剰で、気持ちよく跳ねていた。自己紹介では、薬剤師になりますと高らかに宣言した。医学部志望の仲間と2年目の途中までは、頑張った。しかし、薬学部のセミナーを受けるたびに、私の進む道ではないという直感がどんどん増していく。もちろんそこにいる人全員が合格するわけではないだろうけれど、こんな雰囲気の人たちの中では大学生活は全うできないと感じた。やる前からそういうな！と若いチューターから叱咤もあった。けれど、私のそれまでの人生、どれだけ雰囲気の合わない人たちと過ごす教室でどれだけ窒息してきたかを考えれば、あの高らかな強気の宣言を取り下げるなど何でもなかった。これ以上、人生、棒に振れない、棒に振らないために高校を辞めたんだから。明快だった。

文転を決めたら早かった。毎週各教科の講師にお願いして、良問を出す大学の過去問を解いて持っていく。合いそうな講師のクラスには、大検科でなくても押し込んでもらう。電車に乗って他の校舎へも行った。京大地理なんて贅沢なクラスにも呼んでもらった。精神の安定は父より年上の講師たちが、勉強は父より若い講師たちが全面的に協力してくれた。

センター試験の結果はチューターの予想を上回った。せっかく京大クラスに呼んでもらったのに地理は振るわなかったけれど、現代文、古文、漢文とそれぞれの講師についてもらった国語は満点だった。英語は記憶にないから、とにかく国語が相当底上げしてくれたんだろう。真っ白なスーツを着て自己採点をして、成人式へ向かった。私は二十歳になっていた。

とはいえ、大学は合格通知が一向に来なかった。先に合格した友達が心配しはじめ、まめに電話をくれたり、願書を譲ってくれたりした。2月の終わりになって、都立の短大に合格した。もうここでいいかなと思いつつ、チューターに報告に行くと、「編入が前提なら、2年刻みはもったいない。一つ結果が出ているのだから、ここまでの頑張りは実るから。」と粘り強く説得してくれた。行く気がなくても日程が間に合えば地方の国立にも出願した。早起き苦手だし、二部に抵抗はなかった。そして、一部でグッと来た大学の二部の試験まではまだあった。エンジンのかかりの遅さは受験まで響いたけれど、結果的に私にとってはいいところにたどり着いた。

予備校を離れてからも、年に一度くらいは顔を見に行った。自分のホームタウンのような気持ちが強かったからだろう。それは今でも変わらない。ただ、少しずつ、それがこの世からあの世にお引っ越ししつつある。

現代文の講師に、人生相談をしたり、短歌を送ったりしていた。私は自分の生活や性格に苦しんでいた。講師は病を受けて苦しんでいた。そんな中、生きることを励まし続けてくれた。私には人には言いたくないことがたくさんある。けれど、彼は、叱ることもなく、ふざけるわけでもなく、愛情いっぱいに応えてくれるのだ。恋愛でもなく、親子でもなく、他人の愛の偉大さを突きつけられた。私の人生にこんな人がいてくれたんだと出会ってから20年経って気がついたことになる。

今、彼は今までに増して体調が良くない。続いている計報に、腹をくくったとメールが来た。私は、もしかしたら、もう少ししたら、彼をあの世に奪われてしまうのかもしれない。その時間はゆっくり進むのか、早く進むのかわからない。

ただ私は、生きている証を一行でも書いて、彼に送りたい。読んでもらわなくも、返事が来なくとも、私の中の彼の魂を永遠のものにするために。これからどんな試練があったとしても、私は彼の魂と交信しよう。だから、一行でも多く、書かなくては。生きていくということは辛いことも込みで人生なんだと、体現してくれた恩師の魂までをも奪われてはならないのだ。

全身全霊とは孤独であって、そして、その孤独に気づかないほど、無我夢中、無心の世界なのだ。泣き言は五七五七七にして、飛ばせばいい。

「キミの文章は僕らに読ませるにはもったいないほどのものなのかい」
出会った頃、飄々とした背の高い男性は、私にそんな風に言った。

「キミの文章は僕らに読ませるにはもったいないほどのものなのかい」
出会った頃、飄々とした背の高い男性は、私にそんな風に言った。